

「する／させる」の交替について

外崎 淑子
(東海大学)

要旨

本稿は日本語の使役表現「させる」が「する」と似た状況で生起する要因と、その際の「させる」の意味特徴と統語構造を、形容詞、漢語動詞のデータを中心に考察した。経験者と標的の2項を持つ感情形容詞は「形容詞+させる」のみであること、対象1項を持つ属性形容詞は「形容詞+する」が基本であるが、自律的な事態の達成を含意する場合は「形容詞+させる」も許容できること、「漢語動詞+する／させる」交替は、広義の属性変化を表すものに限り、その交替に、自律的な事態の達成の含意が関わることを論じた。また、分散形態論の枠組みで、V (Cause) の意味の違いから「させる」と「する」が生起することを提案した。

キーワード：使役 形容詞 漢語名詞 分散形態論

1. はじめに

日本語の使役構造には、井上（1976）をはじめ、補文構造が仮定され、使役主の項が追加されて主語となり、使役の「せる、させる」が補文の動詞に付くと分析されることが一般的である。

- (1) <能動文> 花子が 走る
 <使役文> 太郎 [花子が 走る] させる
 ↓
 太郎が 花子を 走らせる [hashir+(s)ase-る]

しかし、日本語には、項が増えることなく他動詞の「する」文が「させる」文と交替する現象がある。

- (2) a. ペットが病気になる。
b. 彼がペットを病気にならせる。
c. 彼がペットを病気にする。
d. 彼がペットを病気にさせる。 (定延 1991, p.130)

使役文は、元の能動文から使役主の項が1つ増えるのが基本である。(2a)の自動詞文であれば、その使役文の(2b)は使役主の項(「彼」)が1つ増えている。一方、「する」の使役形が「させる」であれば、(2c)の他動詞文は項が2つ(「彼」「ペット」)なのだから、(2d)の使役文の項は、そこに使役主を足した3つと予測される。しかし、実際には、他動詞文と同じ2項である。

こうした(2d)のような、他動詞「する」文から項の増えない「させる」文について本稿では扱い¹、その意味と構造について、形容詞と漢語動詞のデータを中心に論じる。

2. 先行研究：黒田(1990)、定延(1991)、森(2004)

黒田(1990)は、「使役の助動詞が『させる』という形で自立語として顕在する場合がある(1990, p.95)」とし、次のような論を展開している。

- (3) a. 譲治が煙草を吸わない (黒田 1990, p.96)
b. 奈緒美が譲治に煙草を吸わなくさせる (黒田 1990, p.96)
c. 譲治が煙草を吸わなくする (黒田 1990, p.97)

(3b)は(3a)に対応する使役文である。もし、「させる」が自立語ではなく、「する」の使役形なのであれば、(3b)は(3a)の使役文ではなく、(3c)の使役形ということになるが、(3c)はそもそも(3b)の意図する補文の意味としては非文である²。したがって、(3b)の「させる」は「する」の使役形ではなく、「させる」が自立語として顕在しているものであるという。また、この「させる」の前には「は」や「さえ」といったとりたて詞を挿入できるので、自立語であるとしている。

一方定延(1991)は、黒田(1990)の文法性判断は認めつつも、黒田(1990)の上記の議論からは「させる」を自立語と捉えてよいとは言えないとし、以下

の受身に関わる例を挙げている。

- (4) a. 私が奴らに殴られたり蹴られたりする。 (定延 1991, p.135)
- b. 私が奴らに殴られたり蹴られたりする。 (定延 1991, p.135)
- c. 奴らが私を殴られたり蹴られたりする。 (定延 1991, p.135)

(4b)は(4a)とほぼ同義である。構造で考えると(4c)は(4b)の補文候補だが、(4c)は解釈不能である。となると、黒田(1990)の「させる」の議論と同様、「される」は「する」の受身形ではなく、自立語としての受け身の助動詞ということになってしまう。しかし、受け身の助動詞は「れる／られる」であり、「される」ではないだろう、というのが、定延(1991)の論考である。

定延(1991)は、(2d)の「させる」は(2c)の「する」の使役形であり、自立語の「させる」は存在しないという立場である。

また、定延(1991)は、(5ab)のように、よく論じられる語彙的使役(他動詞)と統語的使役の意味の違いを、「使役主の被使役者に対しての働きかけ」ではなく、「使役主の事態の成立に対しての働きかけ」という観点から説明している。

- (5) a. 太郎は花子を車に乗せた。 <語彙的使役：他動詞>
- b. 太郎は花子を車に乗らせた。 <統語的使役：自動詞+使役形態素>

定延(1991)は、使役「(さ)せ」の成立条件は、事態の成立に対しての使役主の働きかけが間接的であること、そして、使役主の働きかけが「直接的」か「間接的」かは、状況を考慮に入れた上での認知的な観点からの判断でなければならないと論じている。そして、(2d)は、本来(2c)で表すべき事態であるが、使役主が「ペットが病気になる」という事態に間接的に働きかけているというその間接性を表すために、「させる」が現れるとしている。また、これら項の不足した使役文は、補文構造が仮定できないと考えている。(2d)のような文がどのように成立するかというと、(2c)の「する」の使役形が(2d)の「させる」であるというものである。

定延(1991)は、項の1つ足りない使役文をまとめ、それらの「させる」はすべて、「する」の使役形(s+(s)aseru)であるとしており、「する」か「させる」

かの違いは、先ほど挙げた認知的な観点から判断する「間接性」にあるとしている。定延（1991）より例を1つずつ挙げる。

① YがZを「形容詞連用形」させる

（6）半年の海外生活が、神経質だった次郎をすっかりずぶとくさせた。

② YがZを「形容名詞」にさせる

（7）小林先生が愛の力で、不良の次郎をすっかりまともにさせた。

③ YがZを「名詞」にさせる

（8）外国人選手がホームランを量産して、チームをトップにさせた。

④ YがZを「文」「ように／までに、等」させる

（9）電話の発明は、遠隔地のニュースをすぐ広まるようにさせた。

⑤ Zが「文」「ように／までに、等」させる

（10）電話の発明は、遠隔地のニュースがすぐ広まるようにさせた。

⑥ YがZを「漢語他動詞語幹／外来語他動詞語幹」させる

（11）あの参加者は、前半の議題に対して山のような質問とコメントを強引に続け、後半に予定されていた別の議題を、自動的に次回に延期させた。

⑦ YがZに「～を～」させる

（12）北国での生活が太郎にリンゴを好きにさせた。

⑧ YがZを和語他動詞語幹＋(s)aseru

（13）異常気象が物価の高騰を引き起こさせた。

（いずれも定延 1991 p.131-p.134より）

定延（1991）は①～⑦の「させる」は全て「する」の使役形であるとしているが、その文の構造については、補文を持たないとしつつも、詳しい論考はない。

形容詞文については、森（2004）がインターネット上の文をデータとするコーパスを用い、「XがYを～する／させる」構文の実例から記述的分析を行っている。その結果、次の2つのことが分かったとしている。

I：感情形容詞の連用形に後接するスル-サセル置換では「サセル」が、属性形容詞の連用形に後接するスル-サセル置換では「スル」が優先される傾向にある。

Ⅱ：感情形容詞・属性形容詞の種別を問わず、形容詞の連用形に後接するスル-サセル置換では、X項（ガ格）が非情物であるのが典型となる。

（森 2004 , p.37）

I に関し、森（2004）は感情形容詞の例として（14）を、属性形容詞の例として（15）を挙げている。すなわち、「悲しくする」「悲しくさせる」のどちらも存在するが、「悲しくさせる」のほうが多く、「おいしくする」「おいしくさせる」のどちらも存在するが、「おいしくする」のほうが多いということである³。

（14）何気ない一言が太郎を悲しくする／させる。 （森 2004 , p.33）

（15）その方法が料理をおいしくする／させる。 （森 2004 , p.37）

Ⅱに関していえば、上記例文（14）（15）に見るとおり、どちらもX項（ガ格）は非情物（「何気ない一言」「その方法」）である。

森（2004）は、奥田（1968）、楊（1976）、森田（1988）らの議論を引用しつつ、上述の通り、「する／させる」置換が可能なものは感情形容詞が多いが、属性形容詞であっても、物理的な状態変化を表す語の場合は、「する／させる」置換が起きるとしている。

（16）現在は、この事件とは関係ないのですが、抗ガン剤の代謝（解毒）のジャマをする物質を、抗ガン剤に混ぜて抗ガン剤の効き目を長くさせる内服薬も出ています。

（<http://www.ja-shizuoka.or.jp/k-enshu/yakyoku/tyo/yatyo10.html>）

（森 2004 , p.34）

また、「Y項の名詞句の制御可能性」という観点から、制御可能性が低ければ低いほど「する」を選び、制御可能性が上がれば「させる」を選ぶ傾向があるとし、「（心／気分／気持ち）を暗くする／させる」のデータ数を調べ、「心」の場合は「（暗く）する」の選択が圧倒的に多く、「気分」「気持ち」では、「（暗く）する」「（暗く）させる」にあまり差がないことから、「心」は制御可能性が低いからではないかと論じている。

本稿では、「する」と「させる」が生起する意味的要因を考察し、その構造について提案する。

次節では、「形容詞＋する／させる」について、より詳しく観察する。

3. 「形容詞＋する／させる」

日本語の形容詞で表される状態の出現や変化は、通常、(17b)のように、「形容詞＋なる」の自動詞文として表される。ヲ格補語を取る文としては、「形容詞＋する」の文(17c)と「形容詞＋させる」の文(17d)が存在する。

- (17) a. 生徒達は眠い。
- b. 生徒達は校長先生の話で眠くなった。
- c. (?) 校長先生の話が生徒達を眠くした。
- d. 校長先生の話が生徒達を眠くさせた。

日本語の形容詞で表される状態の出現や変化は、全て「なる」の自動詞文を許容するが、ヲ格補語を取る「する／させる」文のどちらも許容しない形容詞として、(18)に見るように、「珍しい」がある。

- (18) a. このあたりでは、田んぼは珍しい。
- b. このあたりでは、田んぼは珍しくなった。
- c. *急激な宅地化が、田んぼを珍しくした。
- d. *急激な宅地化が、田んぼを珍しくさせた。

これは、「珍しい」の意味特性によると思われる。(18b)は文法文であるが、その意味は、項の「田んぼ」の属性変化、すなわち、「田んぼの性質がありふれたものから珍しいものとなった」という意味ではない。また、連用形の「珍しく」の場合、例えば「太郎は壁を珍しく塗っている」は、「塗った結果、珍しくなる」という結果状態の意味ではなく、「太郎が壁を塗っている」という事態そのものが珍しいという解釈である。形容詞の連用形には、結果状態（「太郎は壁を白く塗っている」）と動作の様態（「太郎は壁を強く叩いている」）の2種類あることが知られているが、「珍しい」は結果状態の意味にならない。「珍

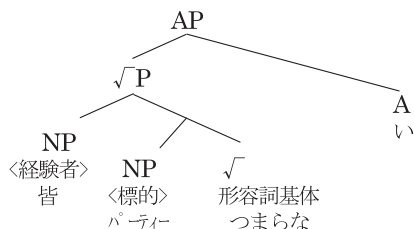
しく」が「形容詞＋する／させる」として用いられないのは、そうした意味特性によるのではないか⁴。

それでは、「形容詞＋する／させる」についてデータを見ていこう。まず、「する」文を許容せず、「させる」文のみを許容する形容詞として、以下のような項を2つ（経験者と感情の向く標的）取る感情形容詞がある。

- (19) a. 皆がパーティーがつまらない。
 b. *太郎の不用意な一言は、皆にパーティーをつまらなくした。
 c. 太郎の不用意な一言は、皆にパーティーをつまらなくさせた。
- (20) a. 太郎が長時間労働が辛い。
 b. *度重なる疲労が太郎に長時間労働を辛くした。
 c. 度重なる疲労が太郎に長時間労働を辛くさせた。
- (21) a. 太郎が夜の散歩が怖い。
 b. *その地にまつわる怪談が太郎に夜の散歩を怖くした。
 b. その地にまつわる怪談が太郎に夜の散歩を怖くさせた。
- (22) a. 太郎が故郷が恋しい。
 b. *秋祭りの知らせが太郎に故郷を恋しくした。
 c. 秋祭りの知らせが太郎に故郷を恋しくさせた。

一方、「形容詞＋する」を許容せず、「形容詞＋させる」のみを許す属性形容詞はない。外崎（2005:209-220）を参考にこれらの感情形容詞の構造を以下に仮定する。

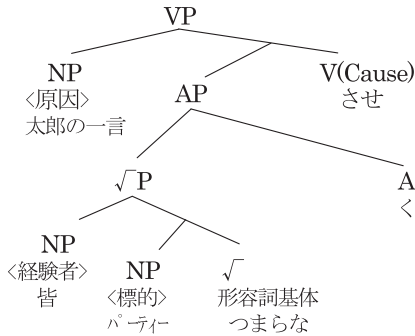
- (23) 2項の感情形容詞の構造（例：皆がパーティーがつまらない）



感情形容詞の「させる」文の構造を以下に仮定する。

(24) 2項の感情形容詞＋させる

（例：太郎の一言が皆にパーティーをつまらなくさせた）



項を2つ取る形容詞文の場合、「す」はなく、「させ」しか選択肢がない。これは、自動詞から項が1つ増えた場合には他動詞と使役の両者の可能性があるのに対し、そもそも項が2つの他動詞の場合に対応する他動詞が存在せず、使役しかないことと平行的である。

同じ形容詞で項が1つの場合はどうだろうか。以下、(ab)が経験者を取る感情形容詞文、(cd)が対象を取る属性形容詞文の例である。(22abc)の「恋しい」は、経験者と標的の両方が必須で1項にならないため、「つまらない」「辛い」「怖い」のみ考える。

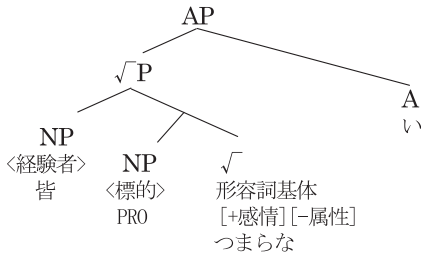
- (25) a. ??太郎の不用意な一言が皆をつまらなくした。
 b. 太郎の不用意な一言が皆をつまらなくさせた。
 c. 太郎の不用意な一言がパーティーをつまらなくした。
 d. ??太郎の不用意な一言がパーティーをつまらなくさせた。
- (26) a. ??度重なる疲労が太郎を辛くした。
 b. 度重なる疲労が太郎を辛くさせた。
 c. 度重なる疲労は長時間労働を辛くする。
 d. ??度重なる疲労は長時間労働を辛くさせる。
- (27) a. ?*その地にまつわる怪談が太郎を怖くした。
 b. その地にまつわる怪談が太郎を怖くさせた。

- b. ナレーターの暗い声がこの映像をもっと怖くした。
 b. ?ナレーターの暗い声がこの映像をもっと怖くさせた。

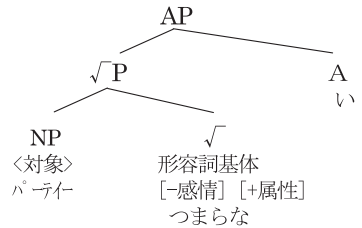
上記は筆者の文法性判断であるが、森（2004）が述べているように、感情形容詞文では「させる」が、属性形容詞文では「する」が優先されることがわかる。

これらの1項の形容詞文の構造を考える。

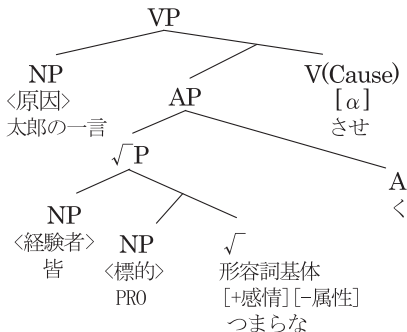
- (28) 1項の感情形容詞の構造
 (例：皆がつまらない)



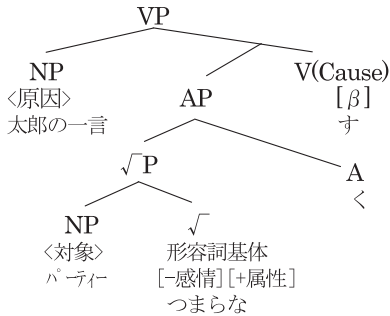
- (29) 1項の属性形容詞の構造
 (例：パーティーがつまらない)



- (30) 1項の感情形容詞＋させる (例：太郎の一言が皆をつまらなくさせる)



(31) 1項の属性形容詞＋する（例：太郎の一言がパーティーをつまらなくする）



分散形態論（Halle and Marantz1993他）的に言えば、(30) (31) のように構造ができあがった後、V (Cause) に/sase/あるいは/s/が挿入される。その際のV (Cause) の素性については、この後に検討するので、ここでは $[\alpha]$ $[\beta]$ としておく。述語全体として、[形容詞基本+A+V (Cause)] となり、その述語が対象NPの素性とも不一致を起こさないV (Cause) の素性から、(30) の場合には/sase/が、(31) の場合には/s/が挿入されると仮定する。

では、感情形容詞としては解釈されない属性形容詞について考察する。基本的に、属性形容詞は、「する」のみを許容し、「させる」を許容しない。

(32) a. 秋の深まりがもみじを赤くした。

b. *秋の深まりがもみじを赤くさせた。

身体部位を項に取る感覚形容詞も、やや不自然ではあるが「する」のみ許容し、「させる」は非文法的である。(33) の「(お腹が) 痛い」の他に「(手が) 冷たい」「(手が) かゆい」なども同様である。

(33) a. (?)そんなに冷たいものを食べると、お腹を痛くするよ。

b. *そんなに冷たいものを食べると、お腹を痛くさせるよ。

では、属性形容詞でありながら「する」と「させる」の両方を許容する (34ab) のような例文について、上述の (32ab) と (35ab) と比較しつつ考察する。

- (34) a. 新しい治療方法がガン細胞を小さくした。
b. 新しい治療方法がガン細胞を小さくさせた。
(35) a. 太郎が論文のフォントサイズを小さくした。
b. *太郎が論文のフォントサイズを小さくさせた。

(32ab) (35ab) は、[もみじ BECOME赤い] [フォントサイズ BECOME小さい] という事態の成立は、(32) は外的要因の「秋の深まり」、(35) は動作主の「太郎」によって容易に起こると解釈される。一方、(34b) が文法文として成立するときの解釈は、[ガン細胞BECOME小さい] という事態の成立は、外的要因の「新しい治療方法」から容易に起こるものではなく、それは「ガン細胞」の自律的な内的変化を促進するに過ぎないという解釈が生じる。我々は認知的な観点から、「ガン細胞」は自ら増殖したり減少したりすることを知っているため、(34b) が文法文になると考えられる。

森 (2004) は、森田 (1988:28-29) の (36b) の例文と説明を引用し、「本来そうなりにくい状況のものをいやおうなくそうさせてしまう」という解釈を生み出すとしている。

- (36) a. 髪をしなやかにする整髪剤
b. 髪をしなやかにさせる整髪剤 (森 2004, p.34 : 森田1988より引用)

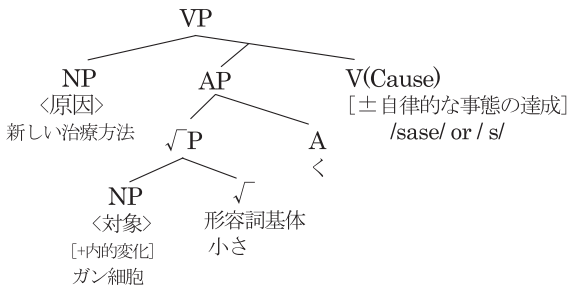
森 (2004) 自身がコーパスから挙げている上記の例文 (16) もこの類である。(16) は「長くさせる」であるが「長くする」であっても文法的である。森田 (1988) の説明「本来そうなりにくい状況のものをいやおうなくそうさせてしまう」という解釈でも問題ないが、もう少し項との関わりで考えると、「X項である外的要因 (使役者、あるいは原因) によって、Y項の自律的な内的変化が促進され、Y項 (の属性) が変化する」という解釈ではないか。感情形容詞との共通点は、感情は、外的要因によって発生するが、あくまで経験者の自律的な心の動きであるという点である。

ここで、(30) (31) の構造で仮定したV (Cause) の素性 $[\alpha]$ $[\beta]$ について考察する。まず、属性形容詞、感情形容詞において「させる」文が文法的となる際に含まれるV (Cause) の素性として [+自律的な事態の達成 (内的変

化等]]が立てられるのではないか。このCauseには選択制限がかかり、Y項は[+自律的な事態の達成]が可能なものでなければならない。すなわち、感情を生じさせる経験者や、(34ab)の「ガン細胞」など、自ら内的変化を起こしうるものである。森（2004）は、「Y項の名詞句の制御可能性」という観点から論じているが、「誰にとっての制御可能性か」という点がわかりにくいため、本稿ではCauseの素性として[±自律的な事態の達成]を素性として考えたい。(34ab)の構造を(37)に仮定する。V(Cause)の素性に[+自律的な事態の達成]が含まれる場合は/sase/が、[－自律的な事態の達成]の場合は/s/がV(Cause)に挿入される。Y項も[±内的(属性)変化]の素性が鍵となり、V(Cause)との整合性が図られる。

感情形容詞は、経験者の項を取ることによって[+自律的な事態の達成]とのみ整合するので、いつでもV(Cause)に/sase/が挿入される⁵。

(37) 新しい治療方法がガン細胞を小さく{した／させた}。



4. 漢語名詞＋させる／する

次に、2字の漢語動詞について考える⁶。

(38)の「短縮」は自動詞、他動詞どちらにも用いうる動詞で、(39)の「激変」は、自動詞としてのみ用いられる動詞である。どちらも、自動詞からの使役文(38c)(39c)が可能である。

- (38) a. 労働時間が短縮する。
 b. 会社が労働時間を短縮する。
 c. 新法が労働時間を短縮させる。

- (39) a. 環境が激変する。

- b. *温暖化が環境を激変する。
- c. 温暖化が環境を激変させる。

自動詞文からの使役文が可能なのは当然である。以下(40)の「厳守」は他動詞としてのみ用いられる動詞である。この場合、他動詞からの項の増えない使役文(40c)は非文となり、他動詞文に使役主の項を足した使役文(40d)は文法的である。

- (40) a. *締め切りが厳守する。
- b. 応募者が締め切りを厳守する。
- c. *応募者が締め切りを厳守させる。
- d. 主催者が応募者に締め切りを厳守させる。

さて、漢語動詞にも、他動詞から項の増えない使役文が存在する。以下(41)–(45)の例がそれである⁷。他に、「強化」「冷凍」「爆破」「浪費」「密封」「新設」「達成」などがある。

- (41) a. ?*若いころの思い出が美化した。
- b. 彼は若いころの思い出を美化した。
- c. 彼は若いころの思い出を美化させて、忘れようとしている。
- (42) a. *zipファイルが解凍した。
- b. 彼はZIPファイルを解凍した。
- c. 彼はZIPファイルを解凍させた。
- (43) a. *秘密兵器が温存する。
- b. 軍が秘密兵器を温存する。
- c. 軍が秘密兵器を温存させる。
- (44) a. *太郎の運命が左右した。
- b. その出来事が太郎の運命を左右した。
- c. その出来事が太郎の運命を左右させた。
- (45) a. *記念スタンプが常設している。
- b. その博物館は記念スタンプを常設している。

c. その博物館は記念スタンプを常設させている。

「漢語動詞＋する／させる」交替は、「形容詞＋する／させる」交替と異なり、非情物主語(Xガ)を典型としない。(41bc) (42bc) いずれも有情物主語であり、(43bc) (45bc) も有情性が高く、非情物主語は (44bc) のみである。

「する／させる」交替の成立要因を考えるために、自動詞がなく、他動詞のみであり、他動詞文から項の増えない使役文が不可となる漢語について考察する。すでに、(40) に挙げた「厳守」の他に、以下、(46)–(48) の他にもたくさん例がある。

- (46) a. *その映画が酷評した。
 b. その批評家はその映画を酷評した。
 c. *その批評家はその映画を酷評させた。
- (47) a. *ノーベル賞が受賞した。
 b. 鈴木さんはノーベル賞を受賞した。
 c. *鈴木さんはノーベル賞を受賞させた。
- (48) a. *住民税が滞納した。
 b. 鈴木さんは住民税を滞納した。
 c. *鈴木さんは住民税を滞納させた。

(46) は「形容詞＋動詞」の漢語であるが、和語に書き下すと「酷く評した」であり、この形容詞「酷く」は結果を含意せず、動詞「評した」の様態を意味する。(47) は、「動詞＋名詞」の漢語であり、「賞」を「受ける」である。(48) は「動詞＋動詞」の漢語であり、和語に書き下すと「納めるのが滞っている」である。いずれも、その動詞の意味に目的語の属性変化を含むものではない。

一方で、他動詞から項の増えない使役文の存在する漢語動詞は、広い意味で目的語の属性変化（の結果）を含む。(41)–(45) の「美化／解凍／温存／左右／常設（する）」、そして、「強化／冷凍／爆破／浪費／密封／新設／達成（する）」などである。その上で、「する」と「させる」の意味の違いを考えると、「形容詞＋させる」との共通点が見えてくる。もう一度、上記 (41bc) の例を考えよう。「美化」とは「実際以上に美しいものとして捉える」ことである。(41c)

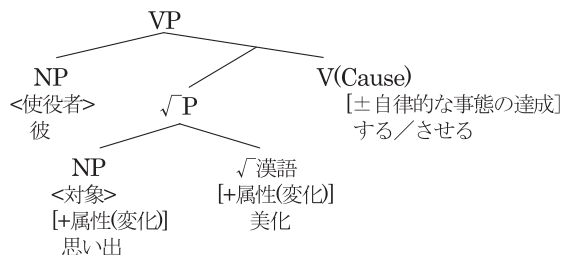
は、文脈上、「なかなか美化しにくい」ものを、「どうにか美化させ（て、忘れる）」のであるから、外的要因からの事態達成のしにくさ、すなわち、「自律的な事態の達成」が関わると言っていいたいだろう。次の例も考える。

- (49) a. *肉が冷凍する。
 b. 太郎は買ってきた肉を冷凍した。
 c. ?太郎は買ってきた肉を冷凍させた。
 d. 肉を急いで冷凍させる方法を教えてください。

「冷凍」は、そのまま「させる」を付けると(49c)のように、許容度が落ちる。しかし、(49d)のように、「急いで冷凍させる」とすると、許容度が上がる。通常、肉を凍らせるには、冷凍庫に入れて時間をおけば容易に実現する。しかし、現実世界の知識により、「肉の凍りやすさ」という属性が「自律的な事態の達成」と関わり、この文の許容度を上げていると言っていいたいだろう。一見、属性変化（の結果）を含まない(45c)の「常設」についても考察する。これは、「記念スタンプが存在しない状態から、常にある状態にしておく」ということで、広義の属性変化と捉える。また、この(45c)は、「あえて来館者の要望に応え、意図して記念スタンプを常設している」といった語感が(45b)と比べると感じられないだろうか。であるならば、「記念スタンプが常設された状態」というのは、現実世界に照らせば、「自律的な事態の達成」と関わると言えるのではないか。

以上のことから「する／させる」交替を起こす漢語動詞の構造を以下のように仮定する。

- (50) 漢語＋する／させる（例：彼は思い出を美化する／させる）



ここで、定延（1991）が挙げた「項の1つ足りない使役文」の例（6）-（13）をもう一度考えたい。（6）-（10）の述語は、全て「する」と交替可能であり、その語感の違いは、「自律的な事態の達成」で説明可能である。次に「する」と交替しない（11）（12）を再掲する。

- （11）あの参加者は、前半の議題に対して山のような質問とコメントを強引に続け、後半に予定されていた別の議題を、自動的に次回に延期させた。
（12）北国での生活が太郎にリンゴを好きにさせた。

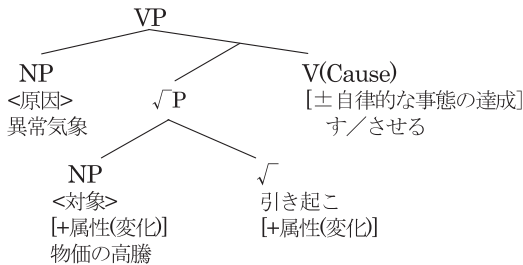
「延期」は、「（議長が）後半に予定していた別の議題を次回に延期した」のように本来他動詞で用いることができるが、（11）の「あの参加者」は、原因を作った人物ではあるが、「延期」を決定した者ではないため、「延期した」とはならない。しかしこの文を「別の議題が次回に延期した」という自動詞文⁸の使役文であると考えれば、「させる」のみが成立していても問題ではない。（12）は、「太郎がリンゴが好きだ」という2項形容動詞文ゆえ、2項の感情形容詞同様、「させる」であって問題ない。残るは（13）の和語他動詞語幹である。定延（1991）は、（13）の他に和語他動詞語幹を2例（（51）（52））挙げている。

- （13）異常気象が物価の高騰を引き起こさせた。
（51）延々と連なるトラック隊の群れが、日をかげらすほどの砂煙を立てさせた。
（定延（1991）による森田1988からの引用）
（52）マネージャーがタレントを番組にださせた。（定延 1991, p.134）

確かに、「和語他動詞語幹の使役形」ではあるが、（13）（52）はサ行の五段活用動詞、（51）は下二段活用動詞で、結果、使役形が「～させる」となっている。そこで、他動詞の使役形と考えるのではなく、他動詞と使役形の同形部分を基体持つ構造を仮定する。

(53) $\sqrt{\text{ }}$ + する／させる

(例：異常気象が物価の高騰を引き起こす／引き起こさせる)



動詞の基体が他動詞とその使役形の同形部分とし、V (Cause) の素性により、/s/、/sase/が挿入されれば、「形容詞＋する／させる」、「漢語動詞＋する／させる」と同じように説明ができる。これは、西山（2000）の分散形態論を用いた自動詞文、他動詞文の分析と基本的に同じである。

6. 今後の課題

本稿では、「形容詞＋する／させる」「漢語動詞＋する／させる」の交替について、その意味と構造を考えた。意味において「属性変化」と「自律的な事態の達成」という観点から、また、構造については分散形態論の枠組みでの解決の可能性を提案した。本稿で考察した分散形態論を用いての統語分析はまだ思索の段階であり、文の意味をどのように統語構造へと移すかということは、今後の課題である。

謝辞

今回、「井上ゼミ論文集」用として準備していた原稿に手を加え、『言語科学研究 井上和子先生追悼号』に投稿できたことを感謝します。

筆者は2015年度、東海大学国内外長期留学研究派遣制度を用い、神田外語大学外国語能力開発センター（FLP）に客員研究員として在籍しました。本研究はそこでの研究の一部です。受け入れ先指導教員の長谷川信子FLPセンター長に多数の助言を頂いたことを感謝します。また、2016年1月16日に慶応大学で行われたLSC（Lexicon Study Circle）で本稿に繋がる研究草稿を発表させ

ていただき、杉岡洋子氏、伊藤たかね氏、長谷部郁子氏、柚原一郎氏他、参加者の皆さんから貴重なご意見を多数頂いたことにも感謝を述べたいと思います。また、有益なコメントを下された査読者の方に感謝いたします。

注

1. 早津（2013）が、他動詞文と項の増えない使役文との似通いについて論じているが、分析対象は「アレクサンドロス大王は、征服した東方世界に自分の名をとどめた都市をいくつも建設させた／建設した」のような、言及されない被使役者（都市建設に関わる労働者）を使役者（アレクサンドロス大王）が使い立てするような例が中心である。本稿では、それらとは異なり、隠れた被使役者が想定しにくい例について主に考えている。
2. 黒田（1990）は（3c）の例文に「*」を付けていないが、本文中で非文である旨記している。
3. 「形容詞＋する／させる」については、他に、池（2015）がコーパスによる研究で、「形容詞—する」文は新聞で550例、小説で360例であるのに対し、「形容詞—させる」文は新聞で20例、小説で23例であると報告している。
4. 「珍しく」は、動作の様態というよりも、陳述副詞的な意味を持つかもしれない。「太郎が壁を珍しく塗っている」をより自然な文とすると、「珍しく太郎は壁を塗っている」であり、「珍しく」のスコープは事態全体「太郎が壁を塗っている」と解釈するほうが自然である。
5. /sase/が挿入されるCauseの意味素性に「自律的な事態の達成」を立てることは、統語的使役文の意味とも矛盾しない。統語的使役文とここで考察中の他動詞から項の増えない/sase/文との意味や統語構造の違いについては、今後の課題としたい。
6. 張（2014）は、読売新聞のデータをコーパスとし、二字漢語動詞を抽出し、その自他を割り当てている。本稿は、張（2014）が取り上げた漢語動詞を参考にデータの考察をした。
7. 全て筆者の文法性判断であるが、これらの文法性の判断にはかなりの個人差があり、また、状況や文脈にも大きく影響される。
8. 張（2014）によれば「延長」は、データ上、他動詞出現数156、自動詞出現数3という圧倒的な違いはあるが、自他動詞という定義である。

参考文献

- Halle, Morris and Alec Marantz. (1993) Distributed morphology and the pieces of inflection,
In Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser (eds.), *The View from building 20: Essays in*

linguistics in Honor of Sylvain Bromberger, 111-176.

早津恵美子（2013）「使役文と原動詞との似通い—使役と原動の対立の弱まり—」『日本語学研究』第36輯23-42. ソウル 韓国日本語学会.

池好順（2015）「他動詞文と使役文の成立条件について —形容詞の状態述語文を中心に—」『日本学・日本語研究の広がり と 連携』2015年度国際学術セミナー 東海大学国際教育センター・漢陽大学BK21Plus 日本研究特性化チーム共催（於：東海大学、2015年6月27、28日）.

井上和子（1976）『変形文法と日本語 下』大修館書店.

黒田成幸（1990）「使役の助動詞の自立性について」『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集』93-104くろしお出版.

Miyagawa, Shigeru (1998) *(S)ASE as an elsewhere causative and the syntactic nature of words*, *Journal of Japanese Linguistics*, 16, 67-110.

森篤嗣（2004）「形容詞連用形に後接するスルーサセルの置換について」『日本語教育』120号33-42.

森田良行（1988）『日本語の類意表現』創拓社.

西山圀雄（2000）「自他交替と形態論」『日英語の自他の交替』丸田忠雄・須賀一好（編）pp. 145-166.

奥田靖雄（1968）「を格の名詞と動詞のくみあわせ（2）」『国語教育』12号84-96.

定延利之（1991）「SASEと間接性」『日本語のヴォイスと他動詞』仁田義雄（編）123-147くろしお出版.

外崎淑子（2005）『日本語述語の統語構造と語形成』ひつじ書房.

楊凱榮（1986）『「XガYヲZニスル」構文と「XガYヲZニサセル」構文との異同について—Zが形容詞の場合—』『言語学論叢』5 17-30 筑波大学一般・応用言語学研究室.

張志剛（2014）『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版.